



Title	小学4～6年生における共感性の表出に関する研究
Author(s)	辰巳, 有紀子; 小林, あきの; 矢吹, 真理
Citation	臨床死生学年報. 2001, 6, p. 54-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9149">https://doi.org/10.18910/9149</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 小学4～6年生における共感性の表出に関する研究

辰 巳 有紀子\*・小 林 あきの\*\*  
矢 吹 真 理\*\*\*

Key words: 共感性, 道徳性, 認知的発達

## はじめに

他者と円滑な人間関係を形成し、より深い対人関係を基盤とした社会生活を送るためには、共感性が重要な役割を果たすといわれている（浅川・松岡, 1987）。

また共感性は、道徳性の表出としての「道徳的行動」や「向社会的行動」の動機となる要因の1つとしてもとらえられている（Eisenberg & Mussen, 1989; Hoffman, 1991; 森下・仲野, 1996; 桜井, 1986; 渡辺・衛藤, 1990）。いいかえれば、共感性は道徳性の基盤としてとらえられているのである。

心理学事典（平凡社, 1995）によると、道徳的価値観とは人間らしい良さを指し、それが個々の人格を支えていくという。よって道徳性を身につけることは人間として大切なことであり、その基盤となる共感性は人間の発達に重要な役割を占めると考えられる。以下、共感性についての先行研究を概観する。

## 1. 共感性に関する先行研究

### （1）共感性の定義

共感性の定義について論じた研究は多いが、その定義における最も基本的な差は「認知的側面」を強調するか、「感情的側面」を強調するかという点にあった（岩脇, 1980）。すなわち、状況把握や役割取得能力といった認知的要因のみが強調されたり、あるいは自分の情動と他者の情動の一致といった情動的側面のみが強調されたりと、どちらか一側面を強調した定義が多かったのである。これに対し浅川・松岡（1987）は、共感性には認知と感情の両側面を包括する定義が適切であるとしている。こうした認知・感情の包括的な共感性の定義を提唱した研究としてFeshbach & Roe (1968) があげられる。

Feshbach & Roe (1968) は、共感性を「他者の情動状態を認知することによって生じた代理的情動反応 (Vicarious Affective Response)」と定義している。同時に、Feshbach & Roe (1968) は共感性の内容として、「感情認知」すなわち他者の感情の弁別、「役割取得」すなわち他者の考え方や役割を予想する能力、そして「情動の共有」の3つの構成要素があるとしている。つまり、他者の情動を認知し、考え方を予想する能力を獲得するという2つの認知的発達を経て、情動の共有が起こり得るとしているのである。Hoffman (1984) も、他者認知の水準と対応した共感性の発達段階仮説を提唱しており、Feshbach & Roe と同様、共感は感情であるが認知の発達に深く関わるとしている。このように認知的発達との関わり

が指摘される共感性ではあるが、それを裏付けるような実証的研究は充分行われたとはいえない、その必要性がある。

## (2) 共感性の表出に影響を及ぼす要因

### ①児童期における共感性の表出の変化

Hoffman (1984) は、児童期以降は共感性の発達の最終段階を通過し、他者の一般的窮状に対する共感性が発揮され、直接遭遇した場面だけでなく、社会的な弱者などへの共感が生じるとしている。すなわち Hoffman は、児童の共感が年齢とともに拡大すると提唱したのである。

それに対して、児童期において共感性の表出が減少するという実証的研究結果がある。例えば Feshbach & Roe (1968) は、共感性について小学校中学年を頂点としその後学年上昇に伴い表出が減少したことを示している。また、小学 1・3・6 年生を対象に調査した浅川・松岡 (1987) も、6 年生では共感性の表出に減少がみられたとしている。さらに、小学 2 年生と 5 年生、中学生を対象に調査した杉山・中里・矢澤 (1990) も、小学校 2 年生より 5 年生の方が共感性の表出が少なかったという結果を示している。

こうした共感性の表出の減少の理由について、浅川・松岡 (1987) は「ウチーソト規範」という点から考察している。ウチーソト規範とはすなわち、幼いときは他者に対して等しく共感が喚起されるが、年齢が上昇すると共に、親しい友人などの「ウチ」に対しては共感が喚起される一方、自分に関わりの無いもの、すなわち「ソト」に対しては共感が生じなくなるというものである。

### ②類似性・類似経験の影響

共感性の表出に影響する要因として、上記の「ウチーソト規範」の他に、Hoffman (1991) は対象との類似性をあげている。すなわち、自分と類似性の高い他者に対しての方が、類似性の低い他者に対するより高い共感性を示す傾向があるとの指摘である。このことから類似性が共感性の表出を促進することが予想される。

ここで、共感と類似した概念として「気持ちの理解」があげられる。この「気持ちの理解」が類似経験の想起によって促進されたという報告がある (久保・無藤, 1984)。久保・無藤 (1984) は「共感」と「気持ちの理解」の定義について厳密な区別をしているが、両者とも「情動と認知の双方を働かせてなされるもの」としている点で共通している。これらのことから、類似経験が共感性の表出を促進する可能性があると考えられる。

### ③ポジティブな情動経験の影響

Hoffman (1984) はさらに、子どもに様々な情動を経験させることが共感性の発達を促進するという。特に多大な愛情を与えられるといったポジティブな文脈の中では子どもの役割取得が促進され、それゆえ他者についての認知感覚が鋭敏になり共感能力が拡張されるだろうと予測している。つまりポジティブな経験が多い子どもほど、共感性が高いだろうというのである。

以上概観したように共感性の表出に影響する要因としては、年齢、類似性、子ども自身の経験といった要因が個別に挙げられている。しかし、これらを包括した実証的な研究は数少ないのが現状である。よって、その 3 つの要因を考慮した研究を行うことには意義があると考えられる。

## 2. 本研究の目的

本研究では以上の点を踏まえて次の検討を行い、共感性における発達的变化、共感性との表出に影響する要因との関連、共感性と道徳性との関連について、考察を行うことを目的とする。対象は、共感性の表出がピークとなり減少に転ずるといわれている小学校4～6年生とする。

## 方 法

### 1. 尺度

#### (1) 作成された調査用紙

予備調査を経て作成された12項目の共感反応質問項目と、12項目の類似経験質問項目を用いた（作成手続きの詳細は佐藤・小嶋・辰巳・小林・矢吹, 1999）。共感反応質問項目は、喜び、悲しみ、怒り、恐れの4つの情動に関して、それぞれ3つの例話を呈示し、例話の主人公に対する共感反応を測定するものである。被験者はa～eの5つの選択肢から、短い物語を読んだときの自分の気持ちに最も近いものを選択する。選択肢の内容としては、aは物語説明文の一部の繰り返し、bは主人公に起こった事実に対してのみへの感想、cは主人公の気持ちを察してはいるものの無関心、dは主人公の気持ちを察しているものの主人公に対しネガティブに言及しているものである。選択肢eは主人公の気持ちを察したうえで主人公との情動の共有に至っている反応、すなわち共感的反応である。さらに、選択肢c、d、eはそれぞれ情動反応が異なるものの、主人公の感情の弁別や役割取得には至っている反応を示すものと思われる。

類似経験質問項目は、共感反応質問項目と対応する経験の有無をたずねるものであり、「ある」、「ない」、「わからない」で回答を得た。

共感反応質問項目は場面理解促進などを目的に絵が添えている。主人公との類似性の1つとして性別が考えられるため、添える絵の主人公の性別を男児・女児の2通り用意した。質問紙を配布する際、対象児本人の性別と主人公の性別が一致する群（性別一致群）、一致しない群（性別不一致群）が半数ずつになるように配布した。フェイスシートでは学年、出席番号、性別をたずねた。

#### (2) HEART—道徳性診断—

道徳性の測定には株式会社東京心理発行のHEART—道徳性診断—が用いられた（道徳性評価研究会、1997）。HEARTではその得点が「（道徳性の）内面形成」と「（道徳性に関連した）行動傾向」とに大別されて算出される。

HEARTにおいて算出される内面形成及び行動傾向得点は、本来得点に従ってレベルI～IVに分類される。しかし本研究では統計的処理を行うため、レベルに分類せず、算出された得点を分析データとした。得点が高いほど、内面形成及び行動傾向における道徳性が高いとされる。

## 2. 調査日時・対象

1998年11月下旬～12月初旬にかけ、東京都港区立S小学校に在籍する4年生39名（男児24名、女児15名）、5年生38名（男児18名、女児20名）、6年生31名（男児19名、女児12名）、

計108名（男児61名、女児47名）の児童に対し、集団調査を行った。データに欠損があった5年生女児1名、6年生女児1名を除いた106名を分析の対象とした。

### 3. 解析

#### （1）得点の算出

共感的反応質問項目で、各例話において選択肢eを選択した回答を共感的反応とみなし、1点を与え、喜び、悲しみ、怒り、恐れの4つの情動ごとの共感的反応得点を算出した（各0～3点）。またその合計を共感的反応合計得点として算出した。

次に感情の認知や役割取得といった認知的発達を示す反応であると考えられる選択肢c、d、eに1点を与え、認知的発達得点として算出した（0～12点）。

さらに類似経験質問項目に対する回答について、「ある」を1度とし、「ない」・「わからない」を0度として4つの情動ごとの類似経験度数を算出した（各0～3度）。

HEARTの採点は発行元である東京心理株式会社に依頼した。結果はクラス一覧表および個人表として返還され、内面形成得点と行動傾向得点が算出された。

性別はダミー変数化し、男児を0、女児を1として扱った。同様に、主人公との性別一致についてもダミー変数化し、不一致群を0、一致群を1として扱った。

#### （2）分析

共感性の認知面を含めた発達的变化を検討するために、共感的反応得点及び認知的発達得点について学年を独立変数としたF検定を行った。

また類似経験が共感性の表出に影響を与える要因について検討するため、学年、性別、性別一致／不一致と類似経験度を説明変数とし、4つの情動場面ごとの共感的反応得点を目的変数とした重回帰分析を行った。

さらに、共感性と道徳性の関連について検討するため、学年、性別、性別一致／不一致と共感的反応得点の4つの情動ごとの得点を説明変数とし、HEARTによって測定された内面形成得点、行動傾向得点を目的変数とした重回帰分析を行った。

分析には統計パッケージ SPSS 9.0J (SPSS, 1999) を用いた。

## 結果と考察

### 1. 共感性の表出

#### （1）共感的反応の発達的变化

共感的反応合計得点と認知的発達得点について学年を独立変数としたF検定を行ったところ、学年の主効果がみられた ( $F (2, 103) = 7.96, p < .001$ )。多重比較を行ったところ、4年生と5年生の間、5年生と6年生の間に有意な差がみられ、5年生が最も高かった (Figure 1)。これは、共感性の表出が一旦上昇した後、小学校高学年以降、学年上昇に従い減少するという先行研究 (浅川・松岡, 1987; Feshbach & Roe, 1968; 杉山ほか, 1990) と一致する結果となった。しかし認知的発達得点についてのF検定の結果、学年による有意な差はみられなかった ( $F (2, 103) = .19, \text{n.s.}$ )。

このことから、小学校4～6年生では他者の情動弁別や役割取得、すなわち認知的側面に差はないものの、情動の共有、すなわち感情的側面において差が生じることが示唆された。

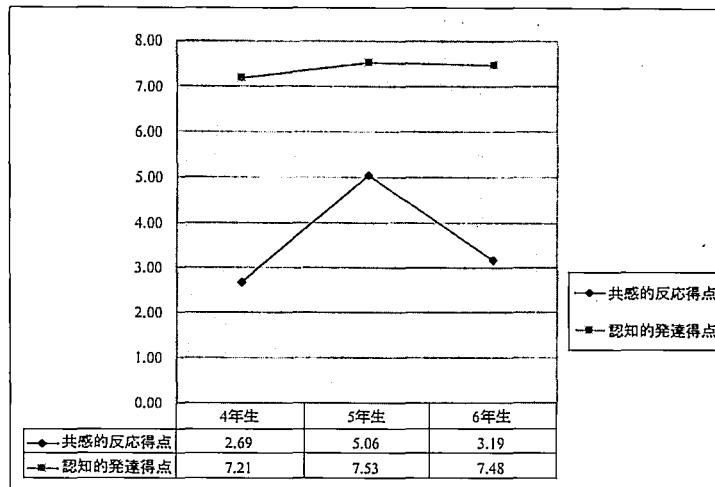


Figure1 共感的反応得点と認知的発達得点の発達的変化

特に本研究では共感的反応が6年生で減少している。こうした発達的変化は、6年生において「ウチーソト規範」(浅川・松岡, 1987)といった要因により共感性の表出が妨げられたものと考えられる。

## (2) 類似性・類似経験と共感的反応の関連

主人公との類似性や類似経験が共感的反応に与える影響について検討するため、学年、性別、主人公との性別の一致／不一致を説明変

数とし、4つの情動場面ごとの共感的反応得点を目的変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。以下のような結果になった(Table1)。

### ①類似性：主人公との性別の一致

主人公との性別一致は、怒り場面 ( $\beta = .20$ , n.s.)、恐れ場面 ( $\beta = .08$ , n.s.) における共感的反応得点には影響を及ぼしていないかった。しかし喜び場面 ( $\beta = .36$ ,  $p < .05$ ) 及び悲しみ場面 ( $\beta = .39$ ,  $p < .01$ ) での共感的反応得点には有意な正の偏回帰係数を示した。よって、すべての情動場面では適用されないが、情動場面を喜びと悲しみに限定すれば、他者との類似性が共感的反応を促進するという知見(浅川・松岡, 1987; Hoffman, 1984)と一致した結果といえた。

### ②類似経験

情動場面と対応する類似経験との偏回帰係数はいずれも低く有意ではなかった(喜び:  $\beta = -.01$ , n.s.; 悲しみ:  $\beta = -.11$ , n.s.; 怒り:  $\beta = -.08$ , n.s.; 恐れ:  $\beta = -.03$ , n.s.)。よって Hoffman (1991) が共感的反応を促進すると提倡した「対象との類似性」に類似経験は含まれない可能性が示された。しかし久保・無藤 (1984) が共感性を測定する際に類似経験を想起させると共感反応が高かったと報告していることから、類似経験の有無そのものが共感的反応に影響を及ぼすわけではなく、他者の状況に照らし合わせて自らの類似経験を積極的に想起するような教示を与えることが共感的反応を促進すると考えられるであろう。

Table1 共感的反応得点に関する重回帰分析結果

	共感性				合計得点
	喜び	悲しみ	怒り	恐れ	
基本的属性					
学年	-.22 *	.21 *	.29 *	.13	.12
性別	.27	.20	.08	.10	.12
性別一致	.36 *	.39 *	.20	.08	.18
類似経験					
喜び	.01	.23 *	.08	-.24 *	.13
悲しみ	-.07	-.11	-.15	.09	-.18
怒り	.12	-.06	-.08	.08	-.01
恐れ	-.06	.16	.09	-.03	.08
R	.31	.45	.32	.29	.34
R <sup>2</sup>	.09	.20 ***	.04	.08	.12

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

### (3) 類似経験度と共感的反応との関連

これまでの結果から、各情動場面の例話と対応した類似経験が共感性の表出を促進する要因であるとはいえたかった。しかし記述の重回帰分析の結果からは、報告された喜び経験の多さが悲しみ場面での共感的反応に影響を及ぼしていることが示された ( $\beta=.23$ ,  $p<.01$ )。つまり喜び経験を多く報告する児童は、悲しんでいる他者に対して共感的反応を示しやすいことが示唆された。これは“子どもはポジティブな文脈の中で他者の考え方や役割に対する理解を発展させていく”という Hoffman (1984) の見解と一致する結果であるといえよう。

また、恐れ場面での共感的反応は喜び経験とは負の関係にあった ( $\beta=-.24$ ,  $p<.05$ )。児童本人が報告する喜び経験が多いほど、恐れ場面の物語主人公への共感性の表出が少ないという結果になった。

## 2. 道徳性と共感的反応得点の関わり

共感的反応と道徳性との関連について検討するために、学年、性別、性別一致、4つの情動場面ごとの共感的反応得点を説明変数とし、内面形成得点・行動傾向得点を目的変数とした重回帰分析を行った。

その結果、内面形成得点・行動傾向得点とも悲しみ場面における共感的反応得点と有意な正の偏回帰係数を示したが、喜び場面、怒り場面、恐れ場面では有意ではなかった (Table2)。

先行研究では共感性が道徳性の基礎となるという知見が得られているが (Eisenberg & Mussen, 1989; Hoffman, 1981; 森下・仲野, 1996; 桜井, 1986; 渡辺・衛藤, 1990)、本研究でも特に悲しみ場面における共感性の表出と道徳性が深く関わっている可能性が示唆された。

Table2 道徳性得点に関する重回帰分析結果

属性	道徳性	
	内面形成	行動傾向
学年	-.16 ***	-.11 *
性別	-.01	.07
性別一致	-.09	-.01
類似経験		
喜び	-.02	.01
悲しみ	-.09 *	.00
怒り	-.02	-.01
恐れ	-.06	-.14 ***
共感性		
喜び	.02	.00
悲しみ	.18 ***	.13 *
怒り	-.02	.08
恐れ	.01	-.03
R	.55	.54
R <sup>2</sup>	.30 ***	.29 ***

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

## 3. まとめと研究展望

本研究では人間の発達にとって重要であると思われる共感性に着目し、共感性の表出に影響を及ぼす要因について検討し、さらに共感性と道徳性の関連についての実証的研究を試みた。その結果以下の示唆が得られた。

第一に小学校中学年以降では、共感的反応は学年すなわち年齢の影響を大きく受けるが、感情弁別や役割取得の程度に差はない。つまり、共感性は小学校中学年以降、認知的側面ではなく感情的側面において大きな変化を遂げる。第二に、対象との性別一致は共感的反応を促進させる。第三に、児童自身の喜び経験の多さが悲しみ場面での共感的反応を促進する。第四に、悲しみ場面での共感的反応は、道徳性の内面形成及び行動傾向に有意に影響を及ぼす。本研究結果からは、「類似経験」、「共感的反応」、「道徳性」の三者について、その因果関係を明確に

することはできなかったが、「児童自身の喜び経験の豊富さは、悲しみ場面での共感性を媒介として内面及び行動面での道徳性を促進する」という示唆を得たといえる。

しかし本研究には以下のような限界があると思われる。まず、本研究では児童本人による喜び経験の報告が多いほど、恐れ場面の物語主人公への共感性の表出が少ないという結果が得られたが、こうした結果の説明要因についても検討する必要性があるだろう。

また、本研究は他者に対する共感的反応について仮想の物語を通して測定したものである。物語の登場人物に対する共感的反応と、実在し相互作用を及ぼし合う人物に対する共感的反応とは質量ともに異なる可能性は否めない。よって今後、より現実場面に近いシチュエーションを設定する必要があるといえる。

さらに、本研究でみられた学年上昇とともに共感性の表出の減少が、発達的変化を反映するものであるとは言い切れない。すなわち本研究は横断的な研究であるため、減少ではなく差異に過ぎない可能性がある。よって縦断的な研究が望まれる。

### 引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達的研究 教育心理学研究, 35, 231-240.
- 道徳性評価研究会(編) 1997 HEART共通手引 東京心理株式会社
- Eisenberg, N. & Mussen, P. 1989 日本道徳性心理学研究会(訳) 1992 道徳性心理学: 道徳教育のための心理学 北大路書房
- Feshbach, N.D. & Roe, K. 1968 Empathy in six-and seven-year-olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- 平凡社 1995 心理学事典
- Hoffman, M.L. 1984 Empathy, its limitations, and its role in a comprehensive moral theory. In Gewirtz, J. & Kurtines, W. (Eds.) *Morality, moral development, and moral behavior*. New York: Wiley.
- Hoffman, M.L. 1991 日本道徳性心理学研究会(訳) 道徳性心理学 北大路書房
- 岩脇三良 1980 共感性の研究 中京大学紀要, 15, 1-22.
- 久保ゆかり・無藤隆 1984 気持ちの理解における類似経験の想起の効果—共感的理発展的検討— 教育心理学研究, 32, 296-305.
- 森下正康・仲野綾 1996 児童の共感性の認知的因子と情動的因子が向社会的行動に及ぼす影響 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 46, 57-71.
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34, 342-346.
- 佐藤真一・小嶋明子・辰巳有紀子・小林あきの・矢吹真理 1999 小学校4~6年生における物語主人公に対する共感的反応 明治学院大学心理学紀要, 9, 27-32.
- SPSS Inc. 1999 *SPSS Base 9.0J User's Guide*, SPSS Inc.
- 杉山憲司・中里至正・矢澤圭介 1990 共感性の発達に関する研究—シチュエーションテストによる共感性の質的変容過程の検討— 東洋大学紀要教養課程, 29, 19-34.
- 渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 38, 151-156.